

開会のあいさつと経験の共有、展示の紹介 (司会 濱岡豊) 【13:00-14:25】

はじめに 濱岡豊(慶應義塾大学教授、CCNE 福島原発事故部会)
あらためて SPEEDI 予測の放棄の問題性を問う - 3.11直前の SPEEDI 担当者会議資料からみえるもの -
古川健三(弁護士)
「あの日風しもの町で起きたこと」
大河原さき(ひだんれん事務局、モニタリングポストの継続配置を求める市民の会 三春共同代表)
「減思力(げんしりょく)」の教訓を学ぶためのパネル展 後藤忍(福島大学教授、CCNE 福島原発事故部会長)
写真展「福島記憶 3.11で止まった町」 飛田晋秀(写真家)
<休憩10分>

放射能に汚染された水や土壌をどうすればよいのか? (司会 後藤忍) 【14:35-17:35】

セッションの趣旨説明 濱岡豊(慶應義塾大学教授、CCNE 福島原発事故部会)
処理汚染水の海洋放出の問題点～何がどれだけ放出されたか 満田夏花(国際環境 NGO FoE Japan)
住民と地権者から見た中間貯蔵決定、実施工程における問題 門馬好春(30年中間貯蔵施設地権者会会長)
8000ベクレル土壌がもたらす(外部)被ばく影響 黒川真一(高エネルギー加速器研究機構 名誉教授)
汚染土粉塵吸入の危険性と環境省「理解醸成」の実態 青木一政(ちくりん舎、フクロウの会)★
放射性物質汚染をめぐる環境法の問題点 大坂恵里(東洋大学教授、CCNE 福島原発事故部会)
産官学の動向 和田央子(放射能ゴミ焼却を考えるふくしま連絡会)★
二本松での実証実験の阻止の経験 鈴木久之(みんなで作る二本松・市政の会)
Q&A・ディスカッション
<休憩10分>

福島での甲状腺がんをどう考えるのか?(1) (司会 明智礼華) 【17:45-18:35】

評価部会の5巡目までのまとめの問題点 ～福島県等への要請行動紹介中心に～
藤岡毅(大阪経済法科大学客員教授)
どう考えても低すぎる福島甲状腺被ばく線量推定値 本行忠志(医師、大阪大学名誉教授)★
Q&A・ディスカッション

福島での甲状腺がんをどう考えるのか?(2).....(司会 濱岡豊)【10:00-12:00】

甲状腺裁判 意見書に書かれた基礎的な事項の復習 津田敏秀(医師、医学博士、岡山大学 名誉教授)★
UNSCEAR 福島報告書における推定被ばく量の過小評価について 黒川真一(高エネルギー加速器研究機構 名誉教授)
県民健康調査の問題点 種市靖行(桑野協立病院非常勤医師)★
Q&A・ディスカッション

<昼休憩>

市民から見た放射線防護、関連分野や国際連携に向けて.....(司会 八巻俊憲)【12:50-14:10】

市民から見た放射線防護 八巻俊憲(元福島県立田村高校理科教員、CCNE 福島原発事故部会)
郷田みほ(市民が育てる「チェルノブイリ法日本版」の会協同代表)
公害、原爆、薬害などとの関連、連携 林衛(科学ジャーナリスト、富山大学准教授)
福島原発事故避難者による国連人権理事会報告 園田美都子(原発賠償京都訴訟原告運営委員国際部)★
Q&A・ディスカッション

<休憩10分>

世代間の連携に向けて.....(司会 後藤忍)【14:20-15:30】

原子力災害時の安定ヨウ素剤の服用に関する教材等の調査 後藤忍(福島大学教授、CCNE 福島原発事故部会長)
フクシマでは何が起こったのか? -チョウ研究から読み解く放射線影響- 阪内香(元琉球大学)
Q&A・ディスカッション

<休憩10分>

市民主導の放射線防護に向けて.....(司会 柿原泰)【15:40-16:55】

市民主導の放射線防護: 提言の概要 柿原泰(東京海洋大学教授、市民科学研究室・低線量被曝研究会)
100mSv 論の問題点 津田敏秀(医師、医学博士、岡山大学 名誉教授)★
ICRP 批判&新たな被曝評価体系を目指す JCRRRA の取り組み 藤岡毅(大阪経済法科大学客員教授)
Q&A・ディスカッション

全体まとめと今後に向けて.....後藤忍(福島大学教授、CCNE 福島原発事故部会長)

展示会場 11月8日(土)13:00-19:00および11月9日(日)10:00-15:30頃まで

自由にご覧ください。

- ・飛田晋秀「(写真展)福島の記憶 3.11で止まった町」
- ・福島大学共生システム理工学類環境計画研究室「減思力(げんしりよく)」の教訓を学ぶためのパネル展
- ・三春町の皆さん「あの日風しもの町で起きたこと」書籍

各講演のパワーポイントなどの発表資料は、こちらの QR コードから
アクセスください。

(プログラムの登壇者の名前の横からダウンロードできます)

URL はこちらです。

<https://www.ccnejapan.com/events/19525/>



濱岡豊(慶應義塾大学教授、CCNE 福島原発事故部会)

学術博士。大学院修士課程では原子力工学を学ぶが、その後、データ分析を重視するマーケティング・サイエンス分野に転向、大学ではマーケティング・リサーチなどを教える。福島原発事故後は、放射線影響に関するデータの再分析なども行っている。著書に『講演録:福島第一原発事故と市民の健康——放射線疫学を読み解くためのデータ分析入門』(原子力市民委員会、2021年)などがある。

古川健三(弁護士)

1965年青森県生まれ。1995年弁護士登録(東京弁護士会)。こども脱被ばく裁判では SPEEDI の問題などを担当。弁護士法人りべるて・えがりて法律事務所所属。

大河原さき(ひだんれん事務局長、モニタリングポストの継続配置を求める会・三春共同代表)

三春町在住。2015年、原発事故被害者団体連絡会立ち上げに関わり事務局を担当。モニタリングポストの継続配置を求める市民の会、これ以上海を汚すな! 市民会議など、県内の複数の運動に関わり現在に至る。

後藤忍(福島大学教授、CCNE 福島原発事故部会長)

工学博士。福島大学教授。専門は、環境計画、環境システム工学、ランドスケープ計画。福島原発事故の直後、福島大学原発災害支援フォーラム(FGF)を結成。また、福島大学放射線副読本研究会での研究成果を『みんなで学ぶ放射線副読本——科学的・倫理的態度と論理を理解する』(合同出版、2013年)として出版。論文に「教育と広報における人権侵害」「原発ゼロ社会への道——「無責任と不可視の構造」をこえて公正で開かれた社会へ」(共著、原子力市民委員会、2022年)など。

飛田晋秀(写真家)

福島県田村郡三春出身・在住。元々は職人さんの撮影を専門とするプロ・カメラマン。3.11後、「事故を風化させない」「事故後の状況をありのままに知ってほしい」「福島県民の思いを知ってほしい」との思いから、福島第一原発事故の被災地を幾度となく訪れて撮影。日本全国で写真展を開催、2019年には写真集「福島の記憶 3.11で止まった町」(旬報社)を出版。

満田夏花(国際環境 NGO FoE Japan)

国際環境 NGO FoE Japan 理事。2009 年から FoE Japan に参加。3.11 東日本大震災以降は、原発事故被害者の支援や脱原発・持続可能なエネルギー政策の実現に向けた各種活動に従事。

門馬好春(30年中間貯蔵施設地権者会会長)

1957年福島県大熊町大沢大字長者原に生まれる。1981年専修大学法学部法律学科2部卒業。福島県立双葉高等学校を卒業後、東京で就職し現在は退職。2018年5月から「30年中間貯蔵施設地権者会」会長。日本環境会議会員。著書に『未来へのバトン 福島県中間貯蔵施設の不条理を読み解く』インパクト出版会。

黒川眞一(高エネルギー加速器研究機構名誉教授)

理学博士。専門は加速器物理学。2011年にヨーロッパ物理学会より Rolf Wideroe 賞、2012年に中華人民共和国科学院国際科技合作奨受賞。市民、科学者とともに宮崎早野論文の検証を行う他、UNSCEAR 福島報告書におけるシミュレーション結果についても批判的検討を行っている。論文に「被曝防護には空間線量そのものを使うことが妥当である——信頼性なく被曝線量を過小評価する宮崎早野第1論文」(岩波「科学」、2019年)など。

青木一政(ちくりん舎／フクロウの会)

1952年神奈川県生まれ。化学・フィルムメーカーのプラント計測制御技術者として勤務する傍ら、核廃棄物と被ばく問題に関心を持ち反原発運動に従事。1989年「福島老朽原発を考える会(フクロウの会)」発足時からの会員。福島原発事故発生直後、同会にて放射能測定プロジェクトを立ち上げ、市民の被ばく最小化のための取り組みに専念。2012年、ゲルマニウム半導体検出器を備えた NPO 法人市民放射能監視センター(ちくりん舎)設立。住民の尿検査による内部被ばく実態調査、放射能ごみ焼却・汚染土再利用の問題に取り組む。論文「福島原発事故による南相馬市の住民の尿中放射性セシウム濃度測定による内部被ばく調査」(第22回環境放射能研究会)、口頭発表「南相馬住民の尿検査による内部被曝調査と土壤粉塵吸入による影響」(第25回「環境放射能」研究会)。

大坂 恵里(東洋大学教授、CCNE 福島原発事故部会)

修士(法学)(早稲田大学)、LL.M.(ペンシルベニア大学)。専門は環境法、民法。日本環境会議福島原発事故賠償問題研究会等において原子力損害賠償の研究に取り組んできた。近時は放射性物質汚染問題にも関心を広げている。著書に『原発事故被害回復の法と政策』(共著、日本評論社、2018年)、「除去土壌の再生利用実証事業の問題点」(環境と公害、2023年)などがある。

和田央子(放射能ゴミ焼却を考えるふくしま連絡会)

東京に生まれ育ち、2001年福島県鮫川村に移住。2004年隣の塙町に転居。2012年自宅の近隣に秘密裏に計画された環境省の放射能汚染ゴミの焼却実験炉への反対運動を皮切りに、バイオマス発電、放射能汚染土、イノベーション・コースト構想の問題に取り組む。

鈴木久之(みんなでつくる二本松・市政の会)

二本松市在住。『みんなでつくる二本松・市政の会』。原発事故時は、安達太良山の裾野にある岳温泉地区にある安達太良(あだたら)小学校勤務。

藤岡毅(大阪経済法科大学客員教授)

大阪大学基礎工学部卒。同大学院博士前期/後期(生物物理・分子生物学)終了後、民間企業勤務。40代半ばで科学史に転身(博士・比較文化)。現在の関心は、科学と政治の関係の考察、特に政治的・イデオロギイ的立場が放射線被ばくの健康影響の科学的評価に及ぼす影響の研究。著書に『核と放射線の現代史』(共著、昭和堂、2021)他、論文に「放射能汚染地域への帰還政策はいかに決定されたか」『科学史研究』(2017)、「低線量被ばく問題とアグノロジー」『21世紀研究』(2019)などがある。

本行忠志(医師、大阪大学名誉教授)

専門は放射線生物学、環境影響評価など。1990年代から、低線量放射線の人へのリスクに関する研究などに取り組む。チェルノブイリ放射能汚染による健康影響は研究テーマの一つであり、福島原発事故後は同地における被ばくによる健康影響について研究している。著書に『甲状腺がん多発 被ばく原因はもはや隠せない―UNSCEAR2020レポート批判』(共著、耕文社、2022年)などがある。

津田敏秀(医師、医学博士、岡山大学 名誉教授)

岡山大学医学部卒業後、内科勤務。岡山大学医学部衛生学教室にて医学博士取得。研究分野は疫学、環境医学、因果推論など。2016年、Epidemiology 誌に、福島県甲状腺検査で検出された甲状腺がんの数十倍の多発は事故によるもので、スクリーニングの結果ではないとする論文を発表。著書『医学者は公害事件で何をしてきたのか』岩波現代文庫など。

種市靖行(桑野協立病院非常勤医師)

2006年より福島県郡山市内で整形外科診療所を開業していたが、開業5年目で東京電力福島第一原発事故に被災。2014年福島県県民健康調査甲状腺検査資格を取得し、県民健康調査甲状腺検査1次検査に参加している。現在は石川県金沢市に移住しているが、毎月福島県郡山市で甲状腺1次検査を継続しており、NPO はっぴーあいらんど★ネットワークと連携し健康相談会も行っている。

八巻俊憲(元福島県立田村高校理科教員、CCNE 福島原発事故部会)

学術博士。福島県郡山市出身。東北大学工学部で応用物理学を学び、卒業後、定年まで福島県立高校の教員を勤める。2011年の福島原発事故以後、諸学会・国際会議等で、福島住民の視点から問題提起。著作に「原子力を考える」川村康文編『STS 教育読本―市民のための科学的リテラシーの育成をめざして』(共著、かもがわ出版、2003年)など。

郷田みほ(市民が育てる「チェルノブイリ法日本版」の会協同代表)

「チェルノブイリ法日本版」という、原発事故の被害者を救済する法律の制定を目標とする市民による個人加盟の会です。「日本版」は1986年のチェルノブイリ原発事故後に旧ソ連で成立した「チェルノブイリ法」=「被害者の責任は国家の責任」「避難・移住の権利」がお手本です。2017年伊勢市の一人の母親からの呼びかけから、2018年3月正式発足。原発事故に代表される放射能災害から、命と健康と暮らしが守られることが憲法により保障される基本的人権であることを宣言し、この条例の制定をめざして 非営利で活動をしています。

林衛(科学ジャーナリスト、富山大学准教授)

岩波書店勤務・雑誌『科学』編集者、フリーランス編集者・ジャーナリスト、東大教養学部教養教育開発機構特任助教授などを経て現職。研究分野は科学コミュニケーション、科学技術社会論(STS)など。福島原発震災、公害被害放置問題に関する論考として「低線量被曝問題はなぜ混乱が続くのか―復興をさまたげる政府の放射線安全論」(市民研通信)、「中学校「理科」で震源モデルを学びたい―大川小児童の思いを語

り継ぐためにも」(地震学会モノグラフ)、「水俣病国賠訴訟で全原告の症状認定」(週刊金曜日)などがある。

園田美都子(原発賠償京都訴訟原告運営委員国際部)

福島原発事故により避難生活が継続している。

阪内香(元琉球大学)

福島県出身。芸術大学で写真を学ぶ。福島原発事故後、チョウを用いた琉球大学チームの研究(フクシマプロジェクト)を知り、大瀧研究室の門を叩く。同大理工学研究科博士後期課程修了。事故から10年目には、研究室の日常を写真日記形式で1年間紹介:

<https://www.ko-photography.net/fukushima-project>。

現在は、JT 生命誌研究館・表現セクター(大阪府)に勤務しながら、調査および撮影を続けている。フクシマプロジェクトは2011年5月に始まり現在も進行中で、これまでに出版した論文は研究室のHPにまとめられている:

<https://w3.uryukyu.ac.jp/bcphunit/fukushimaproj.html>

柿原泰(東京海洋大学教授、市民科学研究室・低線量被曝研究会)

専門分野は科学技術史、科学社会学。放射線被曝の歴史、放射線影響に関する調査研究体制や放射線防護基準についての科学史的研究に取り組んでいる。著書に『よくわかる現代科学技術史・STS』(共編著、ミネルヴァ書房)、『無知学への招待』(共著、明石書店)、論文に「ABCC と原子爆弾影響研究所」(『生物学史研究』95)、「ネオリベラル・テクノクラシー批判」(『現代思想』29(2))などがある。